

## 大会雑感, その将来に向けて

日本鳥学会の会則には毎年1回総会を開く  
とあり、年次大会の中で総会を行う形をと  
っている。1970～87年の18年間の大(総)  
会について、参加者数、論文発表数、記念  
(受賞)講演、賞状、ポスター、映画、シンポジ  
ウム、アピール、エクスカージョンなどを一  
表にして顧み、将来への希望や反省の資料と  
してみた。ここに、その主な点をのべる。

大会参加者数は1970年の39名から漸増  
して1982年の仙台大会で124名(内会員は  
75名)と100名以上の大台に乗り、論文発  
表数も10件内外から1981年の23件、82  
年には40件と急増し、以来2会場となっ  
ている。

内容的には世界的傾向を反映して生態主体(行動も含め)が続いているが、外国で盛んにな  
ってきた生理学の面も加わり、質、量的に進歩がみられる。次のI O C(1990年)、そして21  
世紀に向けての日本鳥学の充実のため、若い方々への期待大である。

質的には、着眼の独創性、技術の開発性、手法の立証性、考察の論理性(とくに適応機能的、  
進化的、社会的など)、結論の総合性(とくに学際的多面性)、量的には、統計的資料(とく  
に普遍性、特殊性の判定)、変動統計年数(変動比較量、周期性の判定)などにおいて世界に  
通用する一級論文が待たれる。

研究には、単純な観察から発展するものと、ある発想を立証、検定していくものがあるが、共  
に何らかの一般性、規則性に到達するのが目標であり、その一つ一つが鳥学への貢献となる。

また、1976年からは、シンポジウムやアピール決議を行って、保護、応用の面でも学会の  
社会的貢献に努めている。とくに、鳥嶼(三宅島アピール1986年)、森林(国有、民有林アピ  
ール1987年)、湿(沼)地(臼井沼1976年、伊豆沼アピール1982年)、都市緑地(都市鳥シ  
ンポジウム1986年)などでの鳥類保護と人間と鳥の共存は重要課題であり、それらの環境保  
存なくしては、“自然鳥学”の場と対象を失うこととなる。この意味からも学会の社会的アピ  
ールや働きかけを続ける必要があると思う。

黒田長久



甲府大会にて(1987. 9. 6)

## 最近の鳥学会大会(1)

ここ10年間に日本鳥学会はまちがいなく着実に成長した。まず、会員数が増加した。年1度の大会では、参加者数も発表数も増えた。また図書の編集や雑誌の出版、シンポジウムや講演会の開催など活動も多様になった。

話を大会に限ってみよう。一般講演は発表数が増加し、ひと昔まえのように1会場におさめることはできなくなり、2会場で並行して発表されるようになった。またポスター形式やフィルム、VTRを用いた発表も行なわれるようになった。さらに例年、シンポジウムがもたれ、その時どきや大会開催地の地域性と関連したテーマがとりあげられ、ほかの場ではきくことができない情報を得、また議論を通じて理解を深めることができるようになった。

研究発表の内容は生態や行動に関係したものの数が多くなったとはいえ、地域や対象に重点をおいた調査研究も少なくなく、この間の特徴は、さまざまな手法を用いて多面的な研究が展開されるようになったとすべきであろう。その結果、当然、個別の現象の記載にとどまらず、ほかの要因との関連や、そのパターンをもたらし仕組みについて掘りさげられるようになった。あえていえば、理論的研究がまだまだ少ないとなるだろうか。

今後この方向に推移することはじゅうぶんに予想される。その場合、解決しなければならない問題がいくつか生じる。第1は、発表形式と会場数との関係の問題である。一般講演をこのまま続けるならば会場数を増加させるか、会期を延長するしかなくなる。会期の延長は当面むずかしいであろう。会場数を増すことは可能だが、ききたい講演が重なってしまっけけないとか、会場を多数用意できる施設を確保することがむずかしいとか(とくに大都市以外では)、いろいろな問題が生じる。

これを解決するひとつの方法は、思いきってすべてをポスター形式とし、シンポジウムのみを講演形式にすることが考えられる。こうすればスペースの問題は解決され、議論も深められるであろう。そうまでしなくても、今後ポスター形式の比重を大きくしてゆくことが必要であろう。そして、特定のテーマをいくつか設定して、それらに対して講演発表を受けつけるようにするのもひとつのやりかたではないかと思われる。

シンポジウムや特別講演については、その時どきにやりかたをくふうすることができる。

研究は大会での発表をもって終りとすることはできない。議論のあと、それを論文にまとめあげ、投稿し、掲載してはじめて終点を迎える。それによって学会誌は充実し、鳥学会もさらに発展することになる。

(長谷川 博)

### 久しぶりに参加して

小笠原 嵩

久しぶりに鳥学会に参加し、黒田会頭をはじめ、会員の元気な姿とお会いすることが出来ました。それにしても皆さんがとても若く感じられたのは、それだけ私が古くなったせいなのでしょう。ともあれ、中村司準備委員長のお人柄のおかげで、あれほどおおぜいの会員が参加されているにはおどろかされました。遠い秋田から参加した甲斐がありました。私は、結局、一つの質問もせずに、若い人達の熱心な講演と質疑に耳を傾け、最近の鳥学の動向を探っていました。内容が実に多彩になっている一方、質疑の方はいまいちの

感がありました。学会は議論の場であるのだから、若い人は、もっと活発に議論しても良いように思えました。

酒の飲めない私も、中村司先生ご自慢の懇親会に参加しました。なかなか良い雰囲気でした。若い鳥仲間とおしゃべりしながらつまむお料理も格別でした。

### 2会場に別れるのが残念

林 俊夫

まず発表件数が多く大会運営が大変だろうと心配したのが杞憂であり、滞りなく進行したことに感心し、中村司先生始め責任者の皆さんに敬意を表します。ただ、2会場に別れ聞きたい発表が重なって、どちらかを割愛し

なければならなかったことは、例年のことながら残念でした。切角の研究をより多くの人に報せるといふ点からは、講演要旨をもう少し詳しくするとか、資料のプリントを全員に配るとかの方法もあると思いますが、これも大変かも知れません。とにかく大変勉強になりました。参加することで私などは若くなります。でしゃばって発表までして貴重な時間を使い申し訳なく思っていますが、その発表を皆さんが温かく聞いて下さって嬉しく思いました。エクスカージョンも良かったと思います。欲を言えば、中村先生の研究室の施設など見せていただければよかったです。

#### 自己研磨の場として

鶴見 みや古

今大会に私は全く勝手として参加しました。とかく自分の狭い研究分野に閉じ込めりがちな研究者にとって、少なくとも年に1度自分の研究成果を他人の前で発表し、また他の研究者の発表を聴くことは、これからの自分の研究を発展させていくうえでとても重要であることを強く感じました。

さらに私個人に限って言えば、山階鳥類研究所の資料室に勤めているため、研究者のかたがたから文献複写などの依頼を受けることも多いのですが、今回こうしたかたがたの発表を伺うことができ、ともすれば日常の雑務に追われ事務的に処理してしまいがちな業務に対して、反省し姿勢を正す機会にもなりました。

発表会場について感じたのは、特にB会場ではスライドが見にくかったこと、出入口が演者に近すぎ常に落ちつかない環境であったことです。それが唯一残念なことでした。

#### 気を張らずに鳥が話せる機会

湯本 光子

私には初めての大会講演発表で、足が地に付かないというのが本当のところでした。今までは鳥は中村司先生のお手伝いをするだけと考えていたこともあり、学校行事と重なることを理由に大会に参加したことはありませんでした。

山梨は豊かな自然に恵まれ、私の住む多摩川源流地域は広大な森林地帯です。山を歩き、巣箱を調査し、鳥の姿を追う楽しさは甲府大会においでくださったかたがたにも分かって

いただけだと思います。未熟な発表に研究方法など多くのご指導をいただくことができ、参加して良かったと思います。

懇親会では、10年以上も前にお会いしたきりの先生がたやお名前だけ存じ上げているかたと、昔話やら今の調査のことなどについての楽しい話に時のたつのも忘れてしまいました。自分では何気なく見ていたことが、他の人には意味のあることであったり、自分とは違う見方があったりすることを知りました。鳥を通して気を張らず話ができる機会が一番得るところが大きかったように思います。

#### オムニバスの楽しさ

山崎 亨

1987年度大会ではふたつの特徴を感じました。ひとつはワシタカ類の発表が増え、ひとつのコーナーを占めるようになったこと、もうひとつはいろいろな職の人がいろいろな鳥についていろいろな方法で発表していることです。オムニバスのような盛りだくさんで楽しい学会でした。

ワシタカ類の発表がアメリカやヨーロッパのように増え、日本の鳥学に楽しい1ページを開いて行って欲しいと私は思いました。内容が盛りだくさんになったことは鳥学会の新しい時代を告げるものでしょう。それらをいかにうまく進行させるかは、テーマを十分に検討して、いかによくプログラムを構成するかにかかっていると思います。

残念であった点をあげておきます。鮎詰の日程を3時間も割いて行われたシンポジウムは、テーマが絞り切れていないように私には思われ、シンポジウムのあり方に疑問を抱きました。2日目の夕方に追いやられたポスター発表にもう少し日の目を見させてやるべきだったと思います。鳥学会の発表で最も悪い点は、見にくいスライドがよくあることです。発表者は人に理解してもらうために、要点をまとめた鮮明なスライドを作成するように心がけてほしいと思います。

#### 鳥学会だから発表できる

中島 欣也

当センターでワシタカ目の保護対策の一環として、若鷲を自然界に放鳥するための増殖システムの開発に成功しています。この件は

今までマスコミ関係には極力伏せてきました。この種の話題が報道されると、きまって変な電話がかかるからで、「鷹を売って儲けるつもりで増殖しているのだらう」という中傷から、「放鳥したことにして内緒で売ってくれ」、「頼んで駄目なら盗みに行くぞ」まで実に迷惑千万です。

当方では人工受精などはせず、飼育下でも人馴れさせず、野生の心を持った鷹に育てています。ペット用の鷹など生産していないのですが、この方策の真意を理解できないらしいのです。鳥学会でなら、この成果を正当に評価してもらえらるだろうと思い発表してみたところ、会期中に多くの人たちから声をかけられ、安心して発表できる場であることを痛感したのでした。しかし、短時間の講演よりもポスター展示にした方が、もっと具体的な論議を尽くせたのではなかったかなとも考えています。

連携感がもてて安心した

山田 律雄

研究内容、発表ともに素晴らしい人がいる一方、超一生懸命で自信をもって発表なさっているのに、失礼ながら、思い込みが激しいためにトンチンカンな内容になっているとしか私には思えない人もいたりして、とても楽しいまたその熱さが自分の胸を赤く染め始めることにも気付かされた大会でした。発表者が多いためか会場も一階と二階に分かれ、同時に進行していました。私を含めみなプログラムをにらみ、上がったたり下がったりで、聞きたい発表が重なったらお手上げでした。

懇親会も盛況で、これだけ“キチガイ”が集まると、世の中からドロップアウトしているのは必ずしも自分だけではないのだなどと、妙な安心感をもちました。

ポスター発表を増やしたら

原 戸 鉄二郎

琉球大学では鳥類の研究を行っている人が少ないので、鳥に関する議論が余りできないのが現状です。大会でさまざまな人と話すことが出来たならば、かけだしの研究者である私にとって大きな収穫になると思い参加しました。しかし遠く沖縄から50時間かけての船旅は、台風の後ということもあって、結局船

酔のさめぬまま学会に参加するはめになってしまいました。

さて、大会の内容についての感想ですが、2会場で講演が行われたため、聞きたい講演が重なったときは残念で仕方ありませんでした。もちろんプログラムを作るときにそのような配慮がなされていると思いますが……。

その点でポスター発表の方をもっと増やせば、口頭講演も1会場で済むのではないのでしょうか。

進行の方では、大会二日目に座長が遅刻するという場面があり、座長自身がその割当を知らなかったという珍時もありました。

ところで今回参加して、私自身は一般講演より、懇親会や休憩時の議論に何となく学会らしさを感じました。

制限時間オーバーは戦略か？

和田 岳

終ってからふりかえると楽しい大会でした。しかし、私には初めての学会発表がプログラムの最後のほうに控えており、それが終るまでは楽しいどころではありませんでした。発表の順番が後の方であるのにも利点はあって、おかげで私は初日と2日目の午前中の一般講演を聞いて、発表の仕方について研究することができました(もっともその成果が自分の発表に生かされたかは疑問ですが)

このように私は他の人の発表を、とくにその発表の仕方に注意して聞いていたのですが、そこで気になったのは、発表がしばしば制限時間をオーバーしてしまう点です。学会で発表することに馴れていない人は仕方がないとしても、学会発表に馴れているはずの人もしばしば制限時間をオーバーして、質問の時間が取れなくなってしまうのには驚きました。あれはよけいな質問をさせないための戦略(?)なのでしょうか。

有意義なシンポジウム

小 藤 弘 美

とくに印象に残ったことといえば、シンポジウムです。なにか偉そうなことを言うようですが、私は社会科学と自然科学の隔たりといったものを考えさせられました。ラッセル・アインシュタイン宣言の中にある科学者としての倫理的責任の問題は、人類と鳥類の共存を計るべき私達にもあてはまる問題だと思います。

ずいぶん堅苦しいことから書き初めました  
が、シンポジウムで北海道のお話と沖縄のお  
話を聞いたのも非常に良かったと思います。  
これらを一時に聞けるというのは、学会大会  
という機会でもないかぎりなかなかないと思  
うからです。総合討論ではさまざまな意見を  
聞くことができて大変ためになりました。

ワインは1杯だけでした

武下雅文

一般講演は全部聞きたいものの、2会場で  
進行しているので無理で、私は講演要旨集を  
チェックして選択しました。

過密の日程で疲れた頭を癒してくれるのは  
懇親会です。著名な研究者のかたと気軽に  
話ができます。

エキスカージョンも中村司先生のお骨折り  
で盛況でした。山梨県鳥獣センターでは上空  
にハチクマが出現しました。小雨の中、ダム  
や金桜神社、昇仙峡を見学し、お目当てのサ  
ントリー山梨ワインナリーへむかいました。  
みなさんが呑み放題と期待したワインは一杯だけ  
でした。サントリー研究室のかたとSさんの  
鳥害談議のおり、別れを惜しむかのように瞬  
時、雪化粧前の富士山頂が姿をみせました。

地方会員として学会に参加することは、刺  
激を適当に得られ有意義です。しかし、せ  
っかくの機会でもあり、総会の前後にでも、鳥  
学の一般的な質疑応答の時間をもうけていた  
だきたいと思います。

「今年も参加してよかった」大会

大田保文

「こころときめきするものすずめのこがひ。  
うつくしきものすずめの子の鶯鳴きするに、  
をどり来る」と、枕草子41段の「鳥は」にあ

ります。私達の先人は1000年以上も前にイ  
ンプリンティングを発見し、応用して潤い  
のある生活をしていたのです。

私は「スズメがケージ内で造巢した」「雛  
が孵化した」などと心をときめかせましたが、  
大会に昨年、今年と参加して「ときめき」が  
質的に変わりました。

昨年、K氏やO氏から結果を評価され、K<sub>2</sub>  
氏から発表を勧められておそろおそろ参加し  
ました。しかし、どのかたがたも温かく、「参  
加してよかった」とほのぼのとしたものを感  
じて帰り、大会のできごとや印象を、クラ  
スの子供たちや同僚に話したものです。

今年は仕事の関係で、参加できないものと  
5月ころはきめていましたが、参加申し込み  
のメ切日が迫るにつれて心がふくらみ、メ切  
日の直前に校長に話したところ、すんなりと  
「OK」が出てホッとしました。今年の大会  
でも、また、ほのぼのとしたものを強く感じ  
ました。

懇親会では多くのかたがたから貴重なお話  
をたくさんいただき、私も数点の情報・資料  
をお届けすることになりました。自由な雰  
囲気の中で話したり、聞いたりしながら、新  
しい情報や好ましい感情等の累積をしていく  
うちに、心のときめきがほのぼのとしたもの  
に変化していくことに気がきました。

大会は私に自然な形で視野を広げてくれ、  
生きている実感を与えてくれました。これは、  
大病を何回か体験したためではなく、本学会  
の潜在的な文化に負うところが大きいように  
思われてならないのです。

多くの素晴らしいかたがた、かわいい鳥たち  
に心から感謝します。



甲府大会参加者 (1987年9月6日 山梨大学構内にて)

### 鳥害研究会へのおさそい

鳥と人間との関わりの中で、人間が鳥によって害を被ったという意識をもつ場面は数多くみうけられます。人間の生命に直接関わる航空機と鳥との衝突、農作物の鳥害、鳥のふんによる建物や洗濯物の汚染などはすぐにも思いうかべることができます。こうした背景のもとに、ここ2、3年間、日本応用動物昆虫学会のおり、鳥害研究会という名前で小集会が開催されてきました。小集会では、鳥害に関する問題から基礎研究までさまざまな講演が行われました。そして、今年の大会で、鳥害に関心を持つ人々による研究会を組織しようというよびかけがあり、「鳥害研究会」が発足しました。

鳥害研究会では、鳥害およびその周辺分野に関係する基礎研究から応用研究までの幅広い分野を対象とし、それらについての情報交換を主な目的として活動を進めています。具体的な活動の内容は、研究会の開催（応用動物昆虫学会、それに鳥学会でも予定）と情報交換誌の発行などです。

会の名称から、鳥害だけに関する研究会であろうとの印象を持つ方も多いただろうと思いますが、対象分野は人間生活との関わりの中なかでかなり広く考えています。また、扱う分野をより幅広くして欲しいという要望もあり、会の名称、対象分野などについて、現在も検討中です。

研究会の会員構成は農業関係の研究者が多いのが現状です。鳥学会会員の中でこの方面に関心をお持ちの方は、ぜひ研究会に参加下さるようお願いいたします。会費は個人会員が年間1千円です。申し込みは、氏名、所属、住所それに興味ある分野を明記し、会費を添えて下記までお送り下さい。

〒305 茨城県筑波郡谷田部町観音台3-1-1

農業研究センター鳥害研究室 鳥害研究会

郵便振替口座 東京0-159047

（鳥害研究会事務局 松岡 茂）

### 第20回 国際行動学会議（IEC）印象記

上田 恵 介

今年8月7日から15日にかけて、アメリカのウィスコンシン大学マディソン校で第20回国際行動学会議が開かれた。私にとっては昨年のオタワでの国際鳥学会議について二度目の国際会議で、人から「国際会議づいてるね」などと言われつつ、またまた懲りずに出かけていった。

日本からの参加者はおよそ15人、そのうち鳥関係のメンバーは私以外に、サギの藤岡君、アオバズクの大庭さん、ウグイスの百瀬君、北大で群集をやっている日野君、そしてミシガンから参加した樋口広芳氏の6人だった。

この時期はちょうどアメリカ鳥学会の大会

と重なったため、アメリカ、カナダの鳥関係の研究者で、来ていない人も多かった。

学会発表についての印象は藤岡君とも話しあったが、全体として、日本の学会のレベルとそんなに差があるわけではない。ただ、はっきり言って、レベルの高いものは非常に高いと思った。とくに若い人たちが頑張っているのは、日本と同じで、観察に何千時間も、また10年以上もかけた、しっかりした研究もあった。

鳥関係の発表では、いろいろと面白いものがあった。その中でも極め付けはオーストラリアのMinotによる、一番仔がまだ巣の中

にいる内に親が産卵し、ヒナが卵を暖めて孵化させるコシジロアナツバメの話であった。ビールのコップを片手に(ポスター発表の会場ではワイン、ビール飲み放題であった)、樋口さんとMinotの話聞いた。

ガラバゴスマockingバードでは性比によって社会システムが変わるというミシガン大のCurryによる発見も興味深かった。オス過剰の年には余剰オスがヘルパーになり、メス過剰の年には一夫多妻が出現するという。

また数百羽にもなるマツカケスの群れが、かなり高度にオーガナイズされているというMarzluffの研究や、繁殖途中で雌雄どちらかの親による遺棄が高率で起こるフロリダのカタツムリトビで、一腹卵数を実験的に調節して雌雄の繁殖戦略を論じたBeissingerの研究も面白かった。

いつも書くことだが、やっぱり女性研究者が多かった。カナダの原野で冬、トラップでヌマライチョウを捕まえ、もう3000羽にマーキングしたというアルバータ大のHannonさんとMartinさん。オーストラリアのメルボルン大のBeilharzはクロトキのmate choiceについて講演した。クロトキが公園の池に大コロニーをつくって営巣し、それを捕らえ放題、観察のし放題という話に、サギで苦労してきた藤岡君は「ええなあ」とため息をついていた。クロコンドルによる情報センター仮説の検証もRabenoldさんという女性であった。

個人的なことを言えば、何人かの有名な研究者と会って話せたことが大きな収穫であった。Alataloは小太りの40才前後のひとで、講演の時、英語を非常にはっきり、大きな声で区切って話すので面白かった。彼は長くスウェーデンのウプサラ大学にいたが、もともとフィンランド出身で、今はフィンランドに戻っているということだった。

デンマークのMøller(メラーに近い発音、モラーでもよいとは言っていたが)は垂れ目のやさしそうな青年で、おそらく年は私と同じくらいだろう。ここ2、3年で国際誌にツバメ、イエスズメ、オオタカ、そして鳥類のmating systemについて10本以上論文

を発表している人にはとても見えない。

ポーランドでミソサザイをやっているWeselowskiはヒゲなどはやして、頭も禿げて、かなり老けて見えるが、まだ40才前だろう。

ハンディキャップセレクションのザハビは顔の大きなイスラエル人で、植物学者の奥さんと二人で参加していた。エクスカージョンの休憩時間にセッカについての話を聞いてもらった。今度、日本へも来るらしい。

藤岡君がこれから2年間、留学するオクラホマ大学のMockは、40才前後のfriendlyな長身の人である。plenary sessionでの彼の講演は、ジョークをふんだんに折り混ぜ、スライドにマンガを沢山入れた面白い(と思う。英語はよくわからなかったのものであった。

さすがに10日間の会期は主催者も長いと思ったのか、途中で馬小屋バーベキューあり、コンサートあり、エクスカージョンあり、早朝バード・ウォークありで、なかなか楽しい学会であった。

最後にひとこと。よく人から「あちこち行けていいですね」と言われる。人は私が大学から旅費をもらって行っているのだと思っているらしい。しかし非常勤講師には旅費も何も出ないし、文部省の科研費も取れない(唯一、私の教えている高校から年5000円の“研究費”をもらっている)。参加はすべて自費(プラス女房の貯金)である。それでも事情の許す限り、国際会議に出てみたいと思う。研究者を目指すからには、やっぱり世界という舞台で勝負しなければならないと思うし、世界の第一線の研究者の講演を聞き、会って話をするだけで、論文からだけでは得られないさまざまな事を学べるからである。

来年はバンクーバーで行動生態学会議がある。さ来年はオランダのユトレヒトで国際行動学会議、1990年には日本で国際生態学会議があって、ニュージーランドでは国際鳥学会議がある。そして1991年は日本で国際行動学会議である。この全部に出れるとはとても思えないが、年1回ぐらい国際会議で発表する“ネタ”を常に用意しておきたいと思っている。

## 伊藤基金と津戸基金のお知らせ

津戸基金については鳥学ニュース第24号でお知らせしましたが、その後会員の伊藤信義氏から、若い研究者の国際会議派遣や外国の鳥学者との交流の費用の一助にと、1,000万円のご寄付がありました。1,000万円がどれほどの値うちのものかは人さまざまでしょうが、本会にとっては維持会員の1,000人分、普通会员だと2,500人分の会費に相当する大金です。去る9月の評議員会では伊藤氏のご厚意をありがたく頂戴することとし、会員の若手研究者が国際鳥学会議に参加する場合の補助金に利息を支出することに決めました。また、津戸基金に

についても評議員会で検討した結果、基金の利息を利用し、国内のどこかで毎年シンポジウムを開催することになりました。

このため、本会は伊藤氏および津戸氏と覚書を交わし、折角のご厚意が「風化」しないように心がけたいと思います。いずれ来る4月の評議員会で基金運営委員会を発足させることとなりますが、とりあえず下記の要領で津戸基金によるシンポジウムの募集を行ないますので、ふるって応募して下さい。なお、伊藤・津戸両氏との覚書は、次号の学会誌に印刷します。  
(森岡弘之)

### 津戸基金によるシンポジウムの公募

第1回シンポジウムを、下記の要領で公募します。来年2月末日までに、次の事項を記載のうえ、応募下さい。(1)シンポのテーマ(テーマは自由)、(2)開催地と会場名(例えば千葉市・市民会館)、(3)責任者名(会員に限る)、(4)講演者の氏名と演題(これは暫定でもよい)、(5)開催日時(公告に時間を要するので、これはなるべく早くに決めること)。

補助金額は2万円前後ですが、大学の教室や公民館を使えば、これで十分にまかなえます。会員への公告はニュースその他を通じて行ないますので、テーマと講演者を決め、会場を確保すれば、むずかしい問題はありません。ただし、シンポ終了後に、簡単な講演要旨、参加者名簿および会計報告を事務所に提出していただきます(これは後日印刷する)。また、シンポは日本鳥学会主催・津戸基金後援とします。応募多数の場合は、評議員会か新設の基金運営委員会(仮称)で選考致します。

〈バックナンバーの大特売〉 バックナンバーの大特売をしています。期間は来年の3月31日まで。前回の鳥学ニュース(第24号p.7)を見て下さい。

なお、次の各号も若干の在庫があります。91/92, 93/94, 95/96, 97/98(各3,000円)、99, 100(各2,000円)。88, 89, 90は品切れです。

〈1988年度会費をお願いします〉 本学会の年会費は前納でお願いしています。会費の納入状況は「宛名ラベル」に記されていますのでお確かめ下さい。詳しくは前号をごらん下さい。 普通会员 4,000円 維持会員 10,000円

〈1988年度大会は11月19・20日、千葉県我孫子市で開催予定〉  
担当は山階鳥類研究所。新しい手帳にさっそくチェックを入れておいて下さい。

### 鳥学ニュース No. 25

1987年12月15日発行 (会員配布)

発行所 日本鳥学会 (〒160) 東京都新宿区百人町3-23-1  
国立科学博物館分館内 (振替) 東京1-6599  
(電話) 03(364)2311  
発行人 黒田長久 編集者 川内博・長谷川博 印刷所 文英社印刷